

【研究ノート】

精神看護実習における精神障害者に対する学生の認識の変化
—精神障害に関する情報源・精神病イメージ調査・社会的距離尺度を用いて—
**Research on Changes in Students' Attitude toward Psychiatric Patients
after Psychiatry Nursing Practicum**
—Based on Sources of Information Related to Psychiatric Patients, Psychiatric
Patients' Image Survey Results, and Social Distance Scale—

伊礼優, 鈴木啓子, 平上久美子

要旨

我が国では、精神障害者の地域移行が推進されている。それを促進する方法の一つとして看護学生が抱く精神障害者に対するイメージの研究がされている。看護学生が否定的イメージ抱く情報源には、マスメディアや身近の精神障害者の存在があり、情報源による影響を明らかにすることは必要である。本研究では、精神看護実習後における学生の精神障害に関する情報源を分析して、精神障害者に対する正しい理解を提供できる講義内容の示唆を得ることが目的である。また、実習後における学生の「精神病に対するイメージ」と「精神障害者に対する社会的距離」の変化を分析して、効果的な講義や実習に繋げるための示唆を得ることも本研究の目的である。調査の結果、マスメディアや近所に住む精神障害者の情報が否定的に影響していた。講義や実習は精神障害者のイメージを肯定的に変化させるために有効であった。過去の体験により肯定的に変化しない学生も存在したため、それらを踏まえてより適切な講義や実習を展開する必要性が示唆された。

キーワード：精神障害者, 精神病イメージ調査, 社会的態度, 社会的距離尺度, 看護学生,
精神看護実習

I はじめに

厚生労働省は精神障害者に対する方向性について、「精神障害者の地域生活の実現に向けて」(2012)を作成した。その中で、「入院医療中心から地域生活中心へ」の基本的理念を実現するための新たな取組みと今後の検討課題が明確に示されている。その背景には、

OECD（経済協力開発機構）の諸外国では、精神科病床数の削減が進展しているが、日本では精神科病床数が多い現状にある。我が国のような入院医療中心の状況下においては、精神障害者の QOL（生活の質）の低下が生じると考えられる。山本（2009）は、地域でライフワーク活動が続けている統合失調症患者は、夢や希望を持つと報告しており、障害者の生きがいの視点からも早期の地域移行が必要とされている。

厚生労働省（2004）は「こころのバリアフリー宣言～精神疾患を正しく理解し、新しい一歩を踏み出すための指針～」を公開して、精神障害者に対する正しい理解を深めることを進めてきた。それから約 10 年が経過しているが、精神障害者に対する否定的イメージは未だに存在している。我が国で精神障害者の地域移行を促進するには、疾患に対する正しい理解の浸透が重要な課題の一つである。精神障害者の地域移行を阻害する要因として、地域支援体制の不備が指摘されてきた（長尾ら，2005）。その阻害要因の解決には至っていないが、解決方法の一つとして地域住民に対する偏見の分析や対策に関する研究もされている（牧田，2006；種田ら，2011；半澤ら，2007）。

看護学生が抱く精神障害者に対するイメージについても研究されており、効果的な講義や実習に関する示唆が得られている（野中ら，2012；金澤，2009；斎藤ら，2007；村井ら，2002；田代，2001）。

金澤（2009）は、看護学生は精神障害者に対して些細で優しいという肯定的イメージを抱くが、その半面、感情的で神経質、理解困難で近づきにくいという否定的イメージも抱くことを報告している。また、精神障害者の否定的イメージが作られた背景として、「映画・ドラマ・ドキュメント番組」が最も多く、「テレビ・新聞など精神障害者が起こした事件の報道」、「身近に精神障害者がいて接する機会がある」等の項目が挙げられていた（金井，2009）。それらのことから、精神障害に関する情報源によるイメージの影響を明らかにすることも必要と考えられる。

田代（2001）は、看護学生の実習における精神障害者との接触体験が肯定的態度に繋がったと報告しているが、野中ら（2010）は看護学生の中には接触体験が否定的イメージを強化される場合もあることを述べている。

それらを踏まえて、本研究では、A 大学の看護学科 3 年次を対象として、精神障害に関する情報源を分析して、精神障害に対する正しい理解を提供できる講義や実習内容の示唆を得ることを目的とした。また、精神看護実習の前後における学生の「精神病に対するイメージ」や「精神障害者に対する社会的距離」の変化を分析して、効果的な実習に繋げる

ための示唆を得ることも本研究の目的としている。

II 研究方法

1. 対象者

A 大学看護系の学生で、平成 23 年度に精神看護実習を行った 3 年次 76 名である。実習前の回答者は 71 名 (93.4%) で、実習後の回答者は 70 名 (92.1%) であった。

2. 用語の概念規定

下記に示す調査票では、「精神障害に関する情報源」や「精神病イメージ」調査という名称が用いられている。そこで本研究では、野村 (2012) の定義を参考として、「精神病」は、医学的に特定の原因、病理生理、症状、経過、予後、病理組織所見がそろった精神に疾患をもつ対象者であることを概念規定とした。また、「精神障害」については、精神疾患によって引き起こされる機能の障害とした。

3. 方法

調査方法は、下記に示した調査票を用いて、無記名・自記式の質問紙調査を行った。尚、この調査は、実習前後の比較を行うため、同様な調査票を用いて 2 回の調査結果を踏まえたものである。

1) 「精神障害に関する情報源」に関する調査

「精神障害に関する情報源」は、加藤ら (2011) らが作成した調査票であり、学生がこれまで精神障害に関して情報を得た項目について、「テレビ」、「新聞・本」、「近隣住民の精神障害者」、「ボランティア」、「講義」、「実習」の 6 項目から構成されており、複数回答で記載するものである。

また学生が情報を得た項目の有無を確認した後の別枠に、その情報源から得られた精神障害者のイメージについて「良いイメージ」、「どちらでもない」、「悪いイメージ」の選択肢が設けられている。その調査票の信頼性や妥当性は証明されていないが、情報源の把握に有用と考えられる調査内容である。本研究では、精神障害に関する情報源から受けるイメージを分析して講義や実習に活用することを目的としており、「精神障害に関する情報源」の調査票を用いている。

2) 「精神病イメージ調査」に関する調査

星越ら（1994）が作成した「精神病」イメージ調査とは、図1に示した通り、精神障害者に対するイメージが20項目の形容詞・副詞の対で構成されており、Semantic Deference法（SD法）で7段階の選択肢が設けられている。その信頼性や妥当性も証明されている調査票である。また、「精神病イメージ調査」は、否定的感情を示す項目（13項目）と病気の重篤さの認識を示す項目（7項目）の分類も可能である。「精神病イメージ調査」を用いた理由は、精神病に対する否定的感情の変化と、病気の重篤さの認識の変化の側面から分析して、講義に活用する他、精神看護実習で学生の不安を把握する目的で用いている。

図1は、その構造が理解しやすい様に質問項目の順番を入れ換えて分類した。実施した調査では、回答の信頼性を高めるため、逆転項目が設定されている調査票を用いたが、図1では逆転項目を元に戻して、「精神病イメージ調査」の趣旨が伝わるように表記している。

1. 冷たい						温かい	否定的感情を示す項目
2. きたない						きれいな	
3. 暗い						明るい	
4. 陰気な						陽気な	
5. 危険な						安全な	
6. 悪い						良い	
7. こわい						こわくない	
8. 迷惑な						迷惑でない	
9. 役立たない						役立つ	
10. 激しい						おだやかな	
11. 深い						浅い	
12. かたい						やわらかい	
13. にくたらしい						かわいらしい	
14. 複雑な						単純な	を病気の重篤さの認識
15. 縁遠い						身近な	
16. 遅い						早い	
17. 不活発な						活動的な	
18. 弱い						強い	
19. 困難な						容易な	
20. さびしい						にぎやかな	

図1. 「精神病」イメージ調査票

3) 「社会的距離尺度」に関する調査

Trute BSらが作成した社会的距離尺度を、星越ら（1994）が改変した日本語版尺度は精神障害者に対する距離間の認識に有用であり、信頼性や妥当性も証明されている。社会的距離尺度は、ある対象について抱く快・不快の感情に対して、自分が保持しようとする

距離の程度を明らかにするものである。

その内容は図2に示した通り、精神科に入院歴のあるAさんが退院後に主治医の指導を受け、社会復帰を目指していると想定し、8項目の社会的場面で、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」の4段階で評価するものである。

<p>精神科に入院歴があり、退院後は外来で主治医の指導を受け社会復帰しようとしている「Aさん」について、以下の質問にお答え下さい。</p> <ol style="list-style-type: none">あなたと同じ地区にAさんらの社会施設ができるとしたらどうしますか？ 1. 賛成する 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 反対するあなたが経営者で人を雇うとしたら、Aさんを雇ってあげますか？ 1. 雇う 2. どちらかといえば雇う 3. どちらかといえば雇わない 4. 雇わないあなたはAさんが同じ地区の奉仕活動に参加するとしたらどうしますか？ 1. 賛成する 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 反対するあなたの家に空き部屋があるとしたら、Aさんに貸してあげますか？ 1. 貸す 2. どちらかといえば貸す 3. どちらかといえば貸さない 4. 貸さないあなたの子どもがAさんと結婚したいと言ったらどうしますか？ 1. 賛成する 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 反対するあなたはAさんと職場が同じだとしたら、楽しく働くことができますか？ 1. できる 2. どちらかといえばできる 3. どちらかといえばできない 4. できないあなたの家族の誰かがAさんと交際するとしたらどうしますか？ 1. 賛成する 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 反対するあなたの家の近所にAさんが家を借りて住むとしたらどうしますか？ 1. 賛成する 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 反対する
--

図2. 社会的距離尺度

4. 分析方法

1) 学生の精神障害に関する情報源については、実習終了後のデータを用いて、精神障害に対する経験の有無を把握した。そして学生が経験した情報源が、精神障害者に対して「良いイメージ」、「悪いイメージ」、「どちらともいえない」にどのように影響しているのかの人数を把握した。

2) 情報源の種類と精神障害者に結びつくイメージの分析では、実習後に精神障害者に対しても、「悪いイメージ」を抱いた学生に焦点をあてて、今後の講義や実習方法の在り方を検討した。そのため、質問紙にある3項目のイメージを、「悪いイメージ」と「どちらともいえない・良いイメージ」の2項目に分類し、イメージと各情報源の関連についてクロス集計した。

3) 「精神病イメージ調査」については、下位尺度である否定的感情の認識と病気の重篤さの認識に分類して分析を行った。尚、SD法の回答を1点から7点に得点化して、実習前後の得点を対応のあるt検定を用いて分析した。

4) 「社会的距離尺度法」については、回答が4件法であるため、賛成や雇う等の肯定的な回答を1点とし、順をおって反対や雇わない等の否定的な回答を4点と得点化した。そして、下位尺度ごとに実習前と実習後の得点の変化を対応のあるt検定を用いて分析した。

上記の統計解析には、SPSS 17.0 Statistics を使用して、統計的有意水準は5%未満とした。

5. 調査期間

2010年9月～2011年1月末日。

6. 倫理的配慮

対象者に対して、研究依頼文書を作成し、研究の趣旨、目的、参加は自由意思であること、無記名の回答とし、成績評価には関係がないこと、データの管理方法、調査結果は論文で公表されることを記載した文書を提示し、さらに口頭で説明した。同意の有無については、アンケート調査票の提出をもって判断するものとした。

尚、本研究は名桜大学人間健康学部倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 23-002)。

III 結果

1. 精神障害に関する情報源とそれから得られた精神障害のイメージ

表1は、実習終了後における精神障害に関する情報源に接した経験の有無と経験から得た精神障害者のイメージの人数(%)を示している。

表1-1の情報源の有無については、学生は講義や実習を終了しているため全ての者が経験していたが、その他ではテレビ(91.4%)、新聞・本(70.0%)、近隣住民の精神障害者(44.3%)から多くの情報を得ていた。

表1-2は、精神障害に関する情報源の経験が有る学生が抱いたイメージを示している。精神障害者に悪いイメージに影響していたのはテレビ(74.6%)が最も多く、次に新聞・本(59.2%)、近隣住民の精神障害者(48.4%)であり、学生が過去に得ていた主な情報源は悪いイメージに結びついている傾向にあった。

また、良いイメージに影響していたのは、実習（69.6%）であり、次いでボランティア（55.0%）、講義（48.5%）の順となっていた。

表1-1. 情報源に接した経験の有無				表1-2. 接触経験有者の精神障害者のイメージ						
情報源	有り		無し		悪いイメージ		どちらでもない		良いイメージ	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
テレビ	64名	(91.4)	6名	(8.6)	47名	(74.6)	12名	(19.0)	4名	(6.3)
新聞・本	49名	(70.0)	21名	(30.0)	29名	(59.2)	16名	(32.7)	4名	(8.2)
近隣住民	31名	(44.3)	39名	(55.7)	15名	(48.4)	14名	(45.2)	2名	(6.5)
ボランティア	21名	(30.0)	49名	(70.0)	2名	(10.0)	7名	(35.0)	11名	(55.0)
講義	70名	(100.0)	0名	(.0)	4名	(5.9)	31名	(45.6)	33名	(48.5)
実習	70名	(100.0)	0名	(.0)	4名	(5.8)	17名	(24.6)	48名	(69.6)

N=70

※経験から得た精神障害者のイメージについては、情報源に接した経験が有りの学生のみを算出している。

2. 精神障害に対する情報源と実習後の精神障害者に対するイメージの違い

表2は、精神障害の情報源と実習後の精神障害者に対するイメージの違いを示している。

尚、この分析においては、実習後に精神障害者に対して、「悪いイメージ」が存在した学生に対する講義や実習方法のあり方を検討するため、「悪いイメージ」と「どちらともいえない・良いイメージ」の2項目に分類し、イメージと各情報源についてクロス集計を行った（フィッシャーの直接確率検定を使用）。

その結果、「新聞・本」と「テレビ」では有意な差が認められ（ $p=0.008$ ）、両情報源において悪いイメージを抱いていた学生は86.2%を占めており、新聞や本、テレビによる情報源は精神障害者に対する悪いイメージに影響していた。

「実習」と「講義」の関連においても、有意な差が認められ（ $p=0.015$ ）、両情報源に良いイメージを抱いていた学生が96.9%を占めており、講義や実習は精神障害者を良いイメージに変化させる影響があると考えられた。

「近隣住民の精神障害者」については、「テレビ」との比較において、有意な差は認められなかったが、両情報源に悪いイメージを抱いていた学生は76.9%を占めており、加藤ら（2011）の研究結果と同様であった。

「ボランティア」と「近隣住民の精神障害者」については、対象人数が少ないが、両情報源に良いイメージを抱く学生は90.9%を占めていた。しかし、「講義」と「近隣住民の精神障害者」では、良いイメージを抱く学生数は高い傾向にはなかった。「実習」と「近隣住民の精神障害者」でも、良いイメージを抱く学生数は高い傾向にはなかった。

表2. 精神障害に対する情報源と実習後の精神障害者へのイメージの違い

		新聞・本		p値			実習		p値
		悪い	良い				悪い	良い	
テレビ	悪い	25名 (86.2)	9名 (47.4)	0.008	新聞・本	悪い	0名 (.0)	29名 (63.0)	0.062
	良い	4名 (13.8)	10名 (52.6)			良い	3名 (100.0)	17名 (37.0)	
		近隣住民		0.454			ボランティア		0.167
テレビ	悪い	10名 (76.9)	10名 (62.5)		近隣住民	悪い	1名 (100.0)	1名 (9.1)	
	良い	3名 (23.1)	6名 (37.5)	良い		0名 (.0)	10名 (90.9)		
		ボランティア		1.000			講義		1.000
テレビ	悪い	2名 (100.0)	12名 (66.7)		近隣住民	悪い	0名 (.0)	15名 (50.0)	
	良い	0名 (.0)	6名 (33.3)	良い		1名 (100.0)	15名 (50.0)		
		講義		1.000			実習		1.000
テレビ	悪い	2名 (66.7)	45名 (75.0)		近隣住民	悪い	1名 (.50.0)	14名 (48.3)	
	良い	1名 (33.3)	15名 (25.0)	良い		1名 (.50.0)	15名 (51.7)		
		実習		0.265			講義		0.195
テレビ	悪い	2名 (50.0)	45名 (76.3)		ボランティア	悪い	1名 (50.0)	1名 (5.6)	
	良い	2名 (50.0)	14名 (23.7)	良い		1名 (50.0)	17名 (94.4)		
		近隣住民		1.000			実習		0.100
新聞・本	悪い	6名 (60.0)	9名 (64.3)		ボランティア	悪い	1名 (100.0)	1名 (5.3)	
	良い	4名 (40.0)	5名 (35.7)	良い		0名 (.0)	18名 (94.7)		
		ボランティア		1.000			実習		0.015
新聞・本	悪い	1名 (50.0)	0名 (43.8)		講義	悪い	2名 (50.0)	2名 (3.1)	
	良い	1名 (50.0)	9名 (56.3)	良い		2名 (50.0)	62名 (96.9)		
		講義		0.062			実習		0.062
新聞・本	悪い	0名 (.0)	29名 (63.0)		近隣住民	悪い	0名 (.0)	29名 (63.0)	
	良い	3名 (100.0)	17名 (37.0)	良い		3名 (100.0)	17名 (37.0)		

※ (%)
 ※ 2×2クロス表によるフィッシャーの直接確率検定
 ※ 「良い」は「どちらでもない」と「良い」を含んでいる
 ※ 対象者は情報源の経験ある学生が分析対象である

3. 「精神病」イメージに対する実習前後の変化

表3は、実習後の学生が抱く精神病に対するイメージの変化を示している。「精神病」イメージ調査票はSD法であり、回答を1点から7点の得点として、対応のあるt検定を用いて分析した結果である。

実習を終了した学生の精神病に対するイメージは、否定的感情の認識を示す項目で、「深い」項目を除く等の12項目に有意な差が認められ、実習後において精神障害者に対する肯定的感情が優位になっていた。

病気の重篤さへの認識を示す項目では、「縁遠い」、「不活発な」、「困難な」の3項目において、実習を通して、精神障害が重篤であるという過剰な認識が軽減した傾向が示された。

表3. 「精神病」イメージの実習前後の変化

	項目 (対語)	実習前・後		t値	有意確率
		前	後		
否定的感情を示す項目	1. 冷たい (温かい)	4.15 (1.17)	2.83 (1.40)	6.41	$p=0.000^{**}$
	2. きたない (きれいな)	4.30 (0.95)	3.83 (1.18)	2.79	$p=0.007^{**}$
	3. 暗い (明るい)	4.54 (1.39)	3.23 (1.33)	5.43	$p=0.000^{**}$
	4. 陰気な (陽気な)	4.39 (1.10)	3.49 (1.20)	4.31	$p=0.000^{**}$
	5. 危険な (安全な)	4.60 (1.12)	3.60 (1.34)	4.80	$p=0.000^{**}$
	6. 悪い (良い)	4.03 (1.14)	3.19 (1.13)	4.37	$p=0.000^{**}$
	7. こわい (こわくない)	4.64 (1.42)	2.84 (1.47)	7.56	$p=0.000^{**}$
	8. 迷惑な (迷惑でない)	3.91 (1.14)	3.00 (1.41)	3.90	$p=0.000^{**}$
	9. 役立たない (役立つ)	4.16 (0.88)	3.33 (1.09)	4.77	$p=0.000^{**}$
	10. 激しい (おだやかな)	4.51 (1.18)	3.64 (1.28)	4.37	$p=0.000^{**}$
	11. 深い (浅い)	3.03 (1.17)	2.84 (1.54)	0.83	$p=0.408$
	12. かたい (やわらかい)	4.49 (0.96)	3.53 (1.33)	4.72	$p=0.000^{**}$
	13. にくたらしい (かわいらしい)	3.69 (0.91)	2.76 (1.18)	5.22	$p=0.000^{**}$
病気の重篤さに関する項目	14. 複雑な (単純な)	5.06 (1.39)	4.90 (1.70)	0.54	$p=0.591$
	15. 縁遠い (身近な)	4.36 (1.48)	2.97 (1.34)	5.83	$p=0.000^{**}$
	16. 遅い (早い)	4.40 (0.87)	4.37 (0.90)	0.20	$p=0.843$
	17. 不活発な (活動的な)	4.47 (1.18)	3.46 (1.21)	4.76	$p=0.000^{**}$
	18. 弱い (強い)	4.37 (1.18)	4.36 (1.21)	0.07	$p=0.943$
	19. 困難な (容易な)	4.97 (0.85)	4.46 (1.26)	2.92	$p=0.004^{**}$
	20. さびしい (にぎやかな)	4.57 (1.27)	4.23 (1.60)	1.51	$p=0.136$

※ SD法の結果を1点から7点に得点化して、対応のある t 検定を用いた

** : $p < 0.01$

4. 社会的距離尺度に対する実習前後の変化

学生の実習前後の社会的距離尺度の得点では、「雇用に関する項目」、「同じ職場で働く項目」、「家族と障害者の交際に関する項目」、「障害者が近所に家を借りて住むことに関する項目」

る項目」で実習後に社会的距離が短縮していた。

表4. 実習前後の社会的距離の変化

		実習前・後	平均値 (S D)	t 値	有意確率
1.	あなたと同じ地区にAさんらの社会施設ができるとしたらどうしますか？	前	1.53 (0.58)	1.00	$p=0.321$
		後	1.43 (0.63)		
2.	あなたが経営者で人を雇うとしたら、Aさんを雇ってあげますか？	前	2.20 (0.67)	3.57	$p=0.001^{**}$
		後	1.83 (0.66)		
3.	あなたはAさんが同じ地区の奉仕活動に参加するとしたらどうしますか？	前	1.41 (0.58)	0.15	$p=0.885$
		後	1.40 (0.57)		
4.	あなたの家に空き部屋があるとしたら、Aさんに貸してあげますか？	前	2.40 (0.92)	0.92	$p=0.361$
		後	2.25 (0.89)		
5.	あなたの子どもがAさんと結婚したいと言ったらどうしますか？	前	2.67 (0.74)	1.84	$p=0.070$
		後	2.45 (0.74)		
6.	あなたはAさんと職場が同じだとしたら、楽しく働くことができますか？	前	1.84 (0.67)	3.19	$p=0.002^{**}$
		後	1.50 (0.61)		
7.	あなたの家族の誰かがAさんと交際するとしたらどうしますか？	前	2.49 (0.79)	2.85	$p=0.006^{**}$
		後	2.11 (0.79)		
8.	あなたの家の近所にAさんが家を借りて住むとしたらどうしますか？	前	1.66 (0.66)	2.29	$p=0.025^*$
		後	1.43 (0.60)		

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

賛成等の肯定的回答を1点として、反対等の否定的回答を4点と得点化して対応のあるt検定を用いた

IV 考察

1. 精神障害に関する情報源とそれから得られた精神障害のイメージについて

学生の精神障害に接した情報源では、「テレビ」や「新聞・本」、「近隣住民の精神障害者」が主であった。それらの情報源から得た精神障害のイメージは表1-2の結果から悪いイメージに影響していた。斎藤ら(2007)らの研究でも、マスメディアから精神障害者に関する情報を得る機会が上位にあり、否定的なイメージに繋がっていたことが報告されている。吉松ら(1993)もテレビや新聞などのマスメディアによる精神障害者の偏見を助長すると指摘してきたが、現状は解決していない。近隣住民の精神障害者との接触体験については、野中ら(2012)の研究でも偏見に繋がることが述べられている。それらの背景を踏まえて学生の教育に関わることが重要と考える。

良いイメージに影響していたのは、「実習」や「ボランティア」、「講義」であり、加藤ら(2011)の研究結果と同様であった。また、表2の結果から、「講義」と「実習」により精神障害者に対する良いイメージの学生が増える傾向にあり、講義や実習の教授方法が効果的であったと思われる。

精神看護学における講義は、「精神保健」、「精神看護学概論」、「精神看護方法論」から構成されている。特に「精神看護学概論」、「精神看護方法論」の講義においては、精神に

病をもつ当事者を講義に招いて、当事者が自らの思いを語り、学生と直接ディスカッションする場を設けている。その他にも、臨床看護師を招いて患者役を行い、学生のコミュニケーション能力を高める為にロールプレイも取り入れて実習に備えている。精神看護実習では、5～6人で構成される学生がチームを組み、複数の患者を学生チーム全員で受け持つ方式を取り入れている。実習においてチームで複数患者を受け持つことは、学生に安心感を与え、精神障害者に対する悪いイメージが軽減した要因の一つであると考えられた。

ボランティアに参加して精神障害の情報を得た学生は、精神障害者に良いイメージを抱く傾向にあった。加藤ら(2011)は、ボランティアについて、「参加者の自己決定による参加であり、本来から精神障害者に対して好意的である」と述べているが、本研究でも加藤らが指摘している要因が影響していると思われた。

「近隣住民の精神障害者」からの情報に対して、学生は悪いイメージを抱いており、過去の経験が強烈であったと推察された。それらの学生は、「講義」と「実習」を終了しても良いイメージに結びつかない傾向が示されており、それらを踏まえて、学生の感情に添った実習指導が必要であると考えた。

2. 「精神病」イメージに対する実習前後の変化について

講義や実習を終了した学生の精神病に対するイメージは、否定的感情の認識を示す「冷たい」、「きたない」、「暗い」、「陽気な」、「危険な」、「悪い」、「怖い」、「迷惑な」、「役立たない」、「激しい」、「かたい」、「にくたらしい」項目で低下しており、講義や実習は精神病のイメージを肯定的に変化させる影響があると示唆された。小山内ら(2009)は、「精神科に関する正しい知識や経験が精神障害に対する良いイメージ形成に関与する」と述べており、講義や実習における正しい知識の提供は障害者に対するイメージを改善する側面からも重要であると考えた。

「深い」という項目のみで、学生のイメージが有意に軽減しなかった要因には、実習を通して精神障害者のライフヒストリーを理解することにより、精神の病が「浅い」ものではなく、心理・社会・生物学的に複雑に絡み合っていることを理解したからと考えられる。

しかし、学生が「深い」というイメージの捉え方が明確でなかったため、結果に反映されなかったことも十分に考えられることから、更なる調査が必要と思われた。

病気の重篤さへの認識を示す「縁遠い」、「不活発な」、「困難な」という項目では、実習により悪いイメージの軽減に影響すると思われた。岡上ら(1986)は、精神障害の病気に

対する一般市民の認識について、「何をするのかわからないので恐ろしい」、「精神障害者の行動はまったく理解できない」という認識を抱いていると報告している。しかし、本研究で対象となった看護学生は、講義を通して専門的な理解を深め、実習で精神障害者との接触体験により、病気の重篤さに対する正しい認識が影響していたと考えた。

一方、星越（1994）は、患者との直接的な接触を有する看護職員に「拒否的感情」が高くなり、精神科勤務年数の長い者に「重篤な病気」の認識が高くなることを報告している。そのことから、学生教育において、学生時代のみならず焦点を当てた教育ではなく、看護職に就いてからも、肯定的なイメージを維持できる教育の必要性があると思われた。

浅井（2005）は、精神障害への偏見の解消には、医療関係者による教育が重要な役割を担うと述べているが、看護教育に携わる者にとっても、偏見の解消に貢献できる講義や実習方法の研鑽が求められていると考えられる。

3. 社会的距離尺度に対する実習前後の変化について

実習後の社会的距離尺度では、「雇用」、「同じ職場で働く」、「障害者との交際」、「障害者が近所に家を借りる」の4項目で社会的距離が短縮していた。種田ら（2011）が住民を対象とした研究では、障害者と距離をおいた関わり方では拒否的態度は低いが、「同じ職場で働く」、「障害者との交際」、「障害者との結婚」に関する項目では障害者を敬遠する傾向があると報告されている。

星越（2005）は、看護学生は将来看護職を希望する明確な目標をもち、障害者に対しても特別な見識を入学時にすでに有していると述べており、本研究で学生の社会的距離が短縮した理由には学生自身が障害者に向き合う姿勢も影響していると考えられた。

しかし、本研究でも、「障害者との交際」に関する項目では、肯定的に変化していたが、「子供との結婚」に関する項目では変化はなく、精神障害者との交際と結婚については、学生の社会的距離が違う事が示された。加藤ら（2008）の研究でも、「同じ職場で働く」、「障害者が近所に家を借りる」、「同じ職場で働く」項目で賛成率が高まり、「子供との結婚」に関する項目では、賛成率が低いことが報告されている。障害者との結婚に関する問題では、個人の価値観が優先される項目であり、結果の数値だけで判断できる問題ではない。しかし、障害者との距離に抵抗を感じている学生の実態を踏まえて講義や実習を展開することが重要であると考えられる。

実習後で、精神障害者と接触体験を経験した学生の社会的距離は4項目で軽減していた。

しかし、星越（2005）は、「精神障害者に対する社会的態度は、精神疾患の知識や障害者との接触体験が豊富になれば、好意的な態度受容がもたらされるとは言えない」と述べている。そのことは、知識や接触体験のみならず、学生が過去に体験した否定的イメージが影響している可能性もあり、それらを把握する教員の対応が必要である。加えて、知識や接触体験を効果的に意味づける指導が求められていると考える。

4. 本研究の限界

本調査においては、A 看護系大学の学生 71 名を対象としていることや、単年のみの結果であり、看護学生の情報源や実習後に得られた精神障害者のイメージを一般化するには限界がある。また、実習後すぐに調査を実施したため、精神障害者に対して肯定的感情が高ぶっていた可能性も否定できない。今後も継続して調査を行い、対象者数を増やすことにより、看護学生が精神障害者に抱くイメージを詳細に分析する必要性があると考えられる。

更に、精神障害者に対するイメージの変化には、講義や実習以外に学生個々が持つ要因も考えられることから、その他の要因を分析することも今後の課題と思われた。

V おわりに

精神障害者の地域移行を推進するには、障害者に対する否定的感情の軽減が必要と考える。その為には、精神障害に対する正しい理解が不可欠である。正しい理解を効果的に提供するには、学生の背景を踏まえることが重要である。今回の結果を踏まえて、講義や実習を工夫展開することが求められる。そのことが精神障害の理解に結びつくと思われる。

V 謝辞

本研究は、A 大学の学生の皆様のご協力がなければ実施できませんでした。協力いただいた学生の皆様に深く御礼申し上げます。

引用文献

浅井暢子「精神障害者に関するしろうと理論」『日本社会精神医学会雑誌』, 14(1), pp.67-77, 2005.

岡上和雄・石原邦雄「精神障害（者）」に対する態度と施策への方向づけ「－精神障害者の

- 社会復帰・福祉施策形成を基盤に関する調査一より」、『季刊・社会保障研究』, 21(4), 1986.
- 加藤知可子・水間朋子「精神看護実習における精神障害者への看護学生の社会的距離態度に関する検討」『日本医学看護学教育学会誌』, 17, pp.52-55, 2008.
- 加藤拓彦・田中真・小山内隆生「医療職を志す大学生の精神障害者に対する社会的態度－精神障害に関する情報源と学習効果－」『日本社会精神医学会雑誌』, 20(20), pp.106-115, 2011.
- 金井律子「看護専門学校 1 年生の精神障がい者へのイメージと受容的行動」『看護教育』, 40, pp.104-106, 2009.
- 厚生労働省障害保健福祉部「精神障害者の地域生活の実現に向けて」, 2011.
- 小山内隆生・山崎仁史・加藤拓彦・田中真・和田一丸「精神障害に関する知識が精神障害者のイメージに与える影響－医療職を目指す学生調査より－」『作業療法』, 28(4), pp.376-384, 2009.
- 斎藤秀光・光永憲香・齋二美子「看護学生における精神障害者のイメージの変化について」『東北大学医療保健学科紀要』, 16(2), pp.105-113, 2007.
- 田代マツコ「看護学生の精神障害者に対するイメージの変化－精神看護学実習前後の調査を通して－」『大阪歯科大学附属専門学校紀要』, 7, pp.25-30, 2001.
- 種田綾乃・盛田展彰・中谷陽二「住民の精神障害者との接触状況と社会的態度－精神障害者との接触状況による類型化の試み－」『日本社会精神医学会雑誌』, 20(3), pp.201-201, 2011.
- 長尾卓夫・太田正幸「日本の精神医療の現状と今後」『日本社会精神医学会雑誌』, 14(1), pp.24-29, 2005.
- 野中浩幸・島村沙也加「精神科臨地実習における偏見に対するイメージの変化」『生物と医学』, 154(5), pp.253-256, 2010.
- 野村総一郎・樋口輝彦他（編）『標準精神医学 第5版』, 医学書院, 2012.
- 半澤節子・中根充文・吉岡久美子・中根秀之「精神障害者に対するスティグマと社会的距離に関する研究－統合失調症事例についての調査結果から（第一報）－」『日本社会精神医学会雑誌』, 16(2), pp.113-136, 2007.
- 星越活彦・洲脇寛・寛成文彦「精神病勤務者の精神障害者に対する社会的態度調査－香川県下の単科精神病院勤務者を対象として－」『日本社会精神医学会雑誌』, 2(2),

pp.93-104, 1994.

星越活彦「精神障害者に対する看護学生の社会的態度」『臨床精神医学』, 34(3), pp.357-363, 2005.

牧田潔「統合失調症に対する社会的距離尺度の作成と信頼性の検討」『日本社会精神医学会雑誌』, 14(3), pp.231-241, 2006.

村井里依子・松崎緑・岩崎みすず・小林美子「学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージー精神看護実習前後の比較を通してー」『長野県立看護大学紀要』, 4, pp.41-49, 2002.

山本恵子「ライフワーク活動をしている統合失調症患者の回復過程ー自己統合力の発揮と居場所・生きがいの発見ー」『日本精神保健看護学会誌』, 18 (1) : pp.104-113, 2009.

吉松和哉・上泉典章「精神病と偏見をめぐる現代社会の病理」『精神医学』, 35(4), pp.342-348, 1993.

Research on Changes in Students' Attitude towards Psychiatric Patients after Psychiatry Nursing Practicum

—Based on Sources of Information Related to Psychiatric Patients, Psychiatric
Patients Image Survey Results, and Social Distance Scale—

Masaru Irei, Keiko Suzuki, Kumiko Hirakami

Abstract

Community placement of psychiatric patients is being promoted in Japan. As one measure, research into the image that nursing students have towards psychiatric patients is being conducted. Influences on students with negative images towards psychiatric patients may include the mass media and the existence of people with mental disorders close to them. It is necessary to clarify the impact of such sources on the students. The purpose of this research is to analyze this after their nursing practicum, and to obtain hints for creating effective lectures aimed at deepening their understanding towards psychiatric patients.

Another purpose is to improve training by analyzing the changes on their “image of psychiatric patients,” and their “social distance scale.” As a result, despite the negative influence that mass media and/or a mentally deranged person close to them may have had on them, lectures and training were often effective in changing their images of mental disability. On the other hand, there were some students whose feelings did not change due to their past experiences. This suggests that there is still room for improvement in our lectures and training programs.

Keywords: the mentally disabled, image of mental disorders, social attitude,
social distance scale, nursing students, psychiatric nursing practicum